プロット①　現代バトル

女武術家が向き合うのは、己の倍以上はあるレスラー風の大男。
周りは金網に囲まれており、その外では興奮した観客たちがわずかな動きも見逃すまいと固唾を飲んでいる。

「はぁっ」

気合いと共に踏み込む女武術家、放たれる蹴りをレスラーは避けようとも防ごうともしない。
足指が剥き出しになったシューズ、それにより放たれる槍のような蹴りを、レスラーは仁王立ちのまま、受ける。

「ぐふふ、効かねぇなぁ……！」
「せい！　やぁっ！　てやぁぁぁっ！」

回転しながら蹴りを繰り出す女武術家、連打、連打、連打。
流麗な蹴り技に歓声が上がる。
しかしレスラーは全く効いている様子はなく、余裕の表情で受け続ける。

「さぁて、もう終わりかい？　ならこっちから……いくぞ！」
「……っ！？」

両腕を広げて掴み掛かるレスラー。
避けようとするその軸足を、大きな手で掴み持ち上げる。

「くぅっ！？」
「さぁて、捕まえたぞう」

釣り上げられた女武術家、その苦悶の表情を見てレスラーは勝ち誇った笑みを浮かべる。

「終わりだ！」

そのまま思い切り振り上げ、地面に叩きつける。

叩きつけようとした、その瞬間。
レスラーの動きが止まる。

「ありがとう」
「なん……だと……？」
「持ち上げてくれて。とてもじゃないけど地上からじゃ背が届かなくて。でも持ち上げてくれたおかげで、届いたわ。あなたの首に」

囁く女武術家、その爪先が模るのはまさに『針』。
鋭く尖らせた足指の形と同じ凹みが、レスラーの首元に生まれていた。

「円錐蓮月蹴……首の頸椎、その神経を麻痺させた。しばらくは一ミリたりとも身体を動かすことはできないわ」
「ぐ、おおお……！」

崩れ落ちるレスラー。ようやく自由を手に入れた女武術家に勝利のコールがなされる。
観客たちの大歓声に紛れ、女武術家はぽつりと呟く。

「呆れたタフさ……二度と戦いたくない相手だね。……尤も、そうもいかないのでしょうけれども」
「そうとも」

と言わんばかりの目でレスラーは笑う。
その目は負けて折れるどころか、むしろリベンジに燃えていた。

「さぁ！　第一試合終わりました！　次の試合は……」

アナウンスと共に退場していく二人。
地下闘技場、ここでは彼女たちのような闘技者たちが日々鎬を削っているのだ。

―終―